

饗 応

牧師 山本 護

おや、この花は知っている、「ウワミズザクラ」じゃないか。でも野道に沿った教会の駐車場横に、こんなに大きな株立ちがあったとは気にもとめなかった。開花の時期、周囲でハラハラ散りゆくヤマザクラに目を奪われていて、不覚でした。申し訳ないような気持ちで一句、「うわみずといふ櫻なり密やかに」。



里山のサクラは豊穡をもたらす田の神の依代(よりしろ)。「サ」は実り豊かな穀霊、「クラ」は神の

座。それがサクラの語源だそうです。花見は元来、田の神を饗応するための祭事。村人が神と共に大いに飲み食いし、歌って踊り、皆が酔いつぶれるまで宴は続きます。凶作にならぬよう命がけで神をもてなす真剣さと、同時にとんでもない無礼講が許されるその日に、抑圧された魂を噴出させます。

調べてみると「ウワミズ」の名はどうやらト筮(ぼくぜい)が語源らしい。「ト」は亀の甲羅を焼く日本古来の占いですが、農村では鹿の肩骨を用いて近世まで行われていました。実りの吉凶は、焼いた鹿骨の裏側に生じる溝「ウラミゾ」で判定します。この木の樹皮で鹿骨を焼いていたことから、訛って「ウワミズ」と名づけられたそうです。

「うわみずといふ櫻なり密やかに」。かつて、ウワミズザクラの樹皮で焼かれた鹿骨の具合を食い入るように見つめ、命がけで神と飲み食いし、歌い叫び、踊り狂い、日常の鬱積を爆発させていた村人たち。ところが今や、この奇妙なサクラは密やかに、誰にも気づかれることなく淡々と春を告げています。

遠い昔、契約の石板を納めた神の箱を運び出した時、「ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で糸杉の楽器、豎琴、琴、鈴、シンバルを奏でた(サムエル下 6:5)」。主の御前で熱狂的な讚美。「主の御前でダビデは力のかぎり踊った。彼は麻のエフォドを着けていた(6:14)」。ダビデに嫁いだサウルの娘ミカルはそれを見て、皮肉たっぷりに言います。「今日のイスラエル王は御立派でした。家臣のはしためたちの前で裸になられたのですから。空っぽの男が恥ずかしげもなく裸になるように(6:20)」。

「ダビデは主の御前に焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげ(6:17)」神をもてなしました。乱痴気騒ぎと神への饗応。教会ではどうてい考えられませんかし、日本の祭事としても文化財的な奇祭としてわずかに残るだけ。かつてはこの山麓の村々にもあった神への饗応と、生きることの真剣さを、ウワミズザクラが密やかに教えてくれました。Ω